

風土



落の臺
神蔵器

大寒や耳にてのひら当てて聴く

戒名の一字の色に寒椿

初春や夢二の画くカレンダー

葱引けばわく母のこゑ妻のこゑ

桂郎のこゑと思へば亀鳴けり

寒明けてをりむらさきの数珠を手に
さきがけの火の匂ひして露の臺
立春や白髪の伸びし尉の眉
残り生よは神の恩寵梅真白
豆撒きて明治をかへす大藁屋
御本尊と結ぶ手綱や冴返る
潜りて、潜りても鳩此の世かな

三十四



竹間集

同人作品



春を待つ

門伝 史会

クリスマス夫が仔豚の英語劇
電飾の並木のとぎれ冬の月
冬もみぢ森の奥なる版画館
仏師作の干支の亥賜ふ明けの春
日を溜めて葉牡丹の渦もり上がる
孫五人ほのぼのとゐて初座敷
手から手へ赤子を渡し春を待つ

「櫻」以後(七十七)

野沢しの武

かまきりの骸を濡らす朝の雨
秋彼岸過ぎこんにやくの酢味噌和
秋雲へ竹籠売りの遠ざかる
卒寿の長姉古稀の末弟柿の秋
栗飯や征きしままなる兄若く
ころがつて乾きぬる筈や山粧ふ
朝寒の庭にきのふの竹箒

大晦日

鈴木 石花

愛犬と冬至の日の出待ちちゐたり
風呂の柚子寄せて童謡口ずさむ
良き宿を伊香保に得たり冬紅葉
石段に夢二を偲ぶ年の暮
富士山を遠見に拝し布団干す
身籠りし犬に藁敷く年用意
掛軸を円相に替ふ大晦日

雪 椿

一門伝 史会一

茶の花に日ざしの移り青柳寺

町田市民文学館（町田ゆかりの文学者展）

桂郎のぐい呑み見たり冬館

桂郎の肉声知らず冬薔薇

「遠蛙酒の器の水を呑む」の句あれば

水呑みしぐい呑ありや冬ざる

鶴川

七畳小屋跡かたも無し落葉風

寄らず過ぐ旧白洲邸年の暮

帰らざる刻と歩みて枯るる中

数へ日や夜逃げのやうに旅仕度

当間高原

十二峠曲る九十九に雪の嵩

積雪計立てて越後の冬構

産土神幾重に深く雪囲ひ
高嶺星ダイナーの窓にクリスマス
バスに乗りおはよう散策息白し
連峰や雪原遠くみはるかす
兎の足跡雪に丸画き人の顔
赤啄木鳥の飛んで輝く雪けむり
人踏まぬ雪踏む越後一の寺
「雲洞庵の土踏んだか」雪降り
長命水氷の裏に水奏で
雪椿雪に枝垂れて濃かりけり

金城山雲洞庵

山河集

同人作品



神蔵
器選

植木屋に声かけてゐる小春かな
十并 三乙

午後急に寒くなりたる漱石忌
吹きて啜る熱き葱汁地震の後
熱爛に触れたる指を耳たぶに
雪こんこん姉が歌へばおとうとも

大和路や土塀をつなぎ冬紅葉
大川 智美

曼荼羅の板絵の紅や冬ぬくし
冬紅葉して室生寺へ太鼓橋
石舞台の中にも入りて冬ぬくし
短日の法隆寺出て鐘を聴く

山頭火のまん丸眼鏡落葉踏む
中村 洋子

天平の古墳に冬の花わらび
咳ひとつ講演マイクに入りけり

登り来て楸郵句碑の小春かな
水底へ日の彩なせる落葉かな

藁一本拾うて終ふ冬囲
竹久みなみ

讚美歌を唄つてメリー・クリスマス
日の丸が一本天皇誕生日
それぞれのイルミネーション十二月
新聞社の外喫煙所クリスマス

時雨るるや三溪の木椅子尺五寸
近藤幸三郎

氷柱より虹の零るる夜明けかな
カリカリと猿の星囁む寒夜かな
枯はちす生きる証しの泡を噴く
山を出て祇園に遊ぶ時雨かな

◇特別作品◇

春隣

稲葉ちよこ

オルゴール鳴る橋渡り冬うらら
ポケットの中に繋ぐ手星凍てる
参道に赤き数珠買ふ冬木の芽
ホイッスルに集まる園児冴ゆるかな
枯山へ進入禁止の縄と札
この山の老いも若きも眠るかな
長湯して湯の花の香や蕪汁
裸木のどの枝にも鳥学校林

まはし読みする育児書や雪催
初雪やよく眠る赤子借りて抱く
虫喰ひの柱の堂や寒椿
声出してけふのはじまる寒卵
フランプアンに木の音のして寒の朝
下校子の今日も手を振る春隣
舌を出す貝にこゑあり寒明くる
豆菓子色のいろいろ二月かな
駅降りて余寒の衿をたて直す
春立つとややの拳の湿りかな
釣船のおそき船脚春浅し
早春の湖の平らを日の渡る

風土集



神蔵器選

考への途中枯野の拡がりぬ 高槻 浅田 光代

猫老いてアリストテレス日向ぼこ

笑はせて包丁を売る暮の市

鳥一羽枝揺らしゐる年の暮

軽き音して数へ日の雑木山

物書いていちにち耳に雪しづく

冬麗や花壇の妻の童唄

風押して来る一本の枯野道

診断を待つ極月のベンチかな

着ぶくれの手をついて身を起こしけり

むらさきに日暮れて冬至十日前

寒雷の一閃太平洋を裂く

九品仏拝す正座や白障子

早送り画像のやうな街師走

試みる夫変身の赤セーター

東京 柴田 久子

浅田 光代

津山 生田 作

しぐるるや先の燻る火掻き棒 津山 生田恵美子

冬ぬくし踏んで固める土竜道

大根漬けて榉の下の余り石

手ぶらにて子の来てをりぬ三十三才

歳晩や片付け切つたる空のあり

一葉の生涯二十四冬薔薇 川崎

石路咲くや一葉姉妹の黄八丈 森田 節子

佗助の横向き忍び返しかな

山茶花の築地に江戸の名残りかな

年の瀬の花舗の香りの中にをり

道濡れて灯の色映すクリスマス 川崎 松井 ふみ

ひと呼吸して決断の息白し

冬深む悔いは悔いとし厨ごと

冬蝶の夢の中なる翅ひらき

冬の園弁当食うて男去る